

クリスマス

鷹巣誠一・小川政弘作 「クリスマス」

牧師 (礼拝最後の祝祷) 仰ぎ願わくは、我らの主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、今も、のちも、とこしえにあらんことを。アーメン。

(音楽) (後奏の賛美歌)

司会者 これで本日の礼拝を終わります。なお、食事のあと、来週のクリスマス礼拝のための準備と、聖歌隊の練習がありますので、聖歌隊と有志の方、役員の方々はお残りください。

中山浩(モノローグ) 今年もクリスマスの時期になったんだなあ。しかし考えてみればおかしいんだよなあ。クリスマスになるとなんとなく教会に来たくなるんだからなあ。でもおれの性分だと、どうしても、クリスマスだからってドンチャン騒ぎをする気になれないんだよな。

ナレーション 彼、中山浩は17歳の高校2年生。普段はごぶさたで、毎年クリスマスになると教会に来るだけという、いわば“クリスマスクリスチャン”です。彼の家は、お母さんがクリスチャンで、小さい時から教会学校へ行っていたのですが、中学高校ともなると、日曜は遊びで忙しくなり、こんなときでもなければ教会へ来ないのでした。

浩が久しぶりで教会に行ったその夜のこと――。

母 浩、お前どうしてクリスマスしか教会へ行かないの？

浩 別に…。なんとなくね。

母 “なんとなく”じゃ分かんないでしょ。小学校の時は毎週行っていたのに。

浩 そんなこと言ったってしょうがないだろ。せっかくの日曜日なんだから、ゆっくりと寝たいし、遊びにだって行きたいよ。友達だって皆遊んでるのに、おれだけ仲間外れになれて言うのかよ。ただでさえ自分のやりたいことをやる時間がないのにさ。

母 そんな。自分がやりたいことと神様とどちらが大切なの？

浩 そんなの分からないよ。

母 じゃどうしてクリスマスになると教会へ行くの？

浩 みなと一緒に騒ぐのがイヤだからさ。

母 神様がお前を呼んでくださっているのよ。お母さんはそう思うわ。

浩 “神様が呼んでいる”？ そんなことあるわけないだろ、おれが行きたいと思ったんだから。そんなことはどうでもいいんだ。とにかくおれには今やりたいことがあるんだ。教会に行こうが行くまいがおれの勝手だろ？ ほっといてくれよ。

(そう言い捨てて出ていく。)

母 待ちなさい。浩！ ひろ…。

(効果音) (ドアの閉まる音)

浩(モノローグ) 全くうるさいなあ、“教会、教会”って。行こうが行くまいがおれの勝手じゃないか。それを母さんは強制しようっていうのかよ。第一、毎週あんところへ行ったら、何もやりたいことをやれないじゃないか。…でも、待てよ。じゃどうしてクリスマスになると行きたくなるんだ？ 友達と一緒にになって騒ぎたくないからか？ 本当にそうか？ でもそれだったら、家に独りでいてやりたいことをやっていたらいいもんなあ。じゃどうしてなんだ？ 母さんが言うように、神様が呼んでいるのか？ そんなバカな。——でも…、神様って本当にいるのかなあ。いるとしたら、どうしておれのことなんかを呼ぶんだろう？ 分からないなあ。

ナレーション 浩君は悩んでしまいました。これほど神様のことについて真剣に考え、悩んだのは彼にとってこれが初めてだったのです。それまでは、イエス様の福音も、十字架の意味も、ただ右の耳から左の耳へ抜けていたのです。

その次の日——。

(効果音) (電話のベル)

母 浩、電話よ。教会の足立さんから。

浩 (モノローグ) 足立さん？ ああ、確か高校生会のリーダーの。なんだろうな、今ごろ。(電話に出る) あ、もしもし、浩ですけれど、こんばんは。

足立里香 (フィルター音) こんばんは、足立です。覚えてますか？ 実はね、今度の土曜日、クリスマス礼拝の前の日ね、高校生のためのクリスマスの集いがあるのよ。歌を歌ったり、ゲームをしたり、お茶を飲んだりして、楽しく過ごそうってわけ。中山君も来てみない？

浩 ええ、じゃあ行ってみます。えーと、何時に行けばいいんですか？

足立 (フィルター音) 2時からよ。じゃあ待ってるわね。

ナレーション 彼の頭には、お母さんが言った“神様が呼んでいる”という言葉が残っていました。そして彼には、どうして神様が自分呼んでいるのかを知りたいという気持ちがあったのです。そして土曜日——。

(効果音) (教会のガヤ)

浩 こんにちは。

足立 中山君、こんにちは！ よく来てくれたわね。待ってたわ。どうぞ。

ナレーション こうして集会は始まりました。

足立 それではみんなで「きよこの夜」を歌いましょう。

(音楽) (「きよこの夜」1 節合唱)

ナレーション 歌を歌ったり、ゲームをしたり、そして最後にはプレゼント交換をしたりして、浩はみんなと一緒に心の和むひと時を過ごしました。

その集会が終わった時——。

足立

どうだった、中山君、教会でのクリスマスは？

浩

楽しかった。なんか、久しぶりに心が温められたっていう感じです。

足立

そう、それはよかったわ。夕食後には、みんなでキャロリングに行くんだけど、中山君も行ってみない？

浩

“キャロリング”ってなんですか？

足立

クリスチャンのお友達の家を訪問してね。キャロル、つまりクリスマスの賛美歌を歌って、お互いにイエス様のご降誕を喜び合うの。

ナレーション

浩は、一瞬迷いました。夜は映画を見に行くつもりだったのです。それに、“自分なんか行ってもいいのだろうか”という思いもありました。けれども、彼の心は、たった今味わったクリスマス会の温かい雰囲気燃やされていたのです。「出てみなさい」とささやく心の声に押し出されるように、彼は答えていました。

浩

——行きます。お願いします。

ナレーション

夜も8時を過ぎると、外の空気もさすがに冷えてきました。浩は、コートのえりを立てて身震いしながら、それでも不思議に高鳴る心を抑えて、皆と一緒に初めての訪問先、教会員の川瀬さんのところに着きました。

足立

さあみんな、ロウソクに火をつけて。——じゃあいい？ 始めに「牧人羊を」ね。三、四！

(音楽)

(一同、「牧人羊を」1、2節合唱)

浩(モノローグ)

「…喜びたえよ。主イエスは生まれぬ」か。みんな本当に心から喜んで歌ってる。こんなこと、僕の生活の中ではなかったなあ。

(効果音)

(ドアの開く音)

川瀬

まあ皆さん。来てくださったのね。クリスマスおめでとう！

一同

クリスマス、おめでとうございます！

川瀬

寒かったですよ。さあ中に入って、熱いお茶一杯召し上がって。

足立

ありがとうございます。その前に、川瀬さんも一緒に一曲賛美しませんか？

川瀬

はいはい、喜んで。

(音楽)

(各1節)「あめには栄え」(FO)(FI)「荒野の果てに」(FO)(FI)「神のみ子はこよいしも」(FO)

ナレーション

川瀬さんのお宅から始めて、5軒の家を訪問し終わった時、時計はもう10時を回っていました。みんなと別れて家に帰る道すがら、床に着いてからも、浩の心の中は、今まで味わったこともない不思議な喜びに満たされていました。

浩(モノローグ)

「…とこしなえのみ言葉は 今ぞ人となりたもう」か。クリスマスはイエス様の誕生日だっていうことは、昔、教会学校のクリスマスでも、毎年先生が教えてくれた。そのことは、頭の中ではよく分かっていた。だけど、だけどどうしてその二千年前の一人の人の誕生を、ああやってみんな祝うんだろう？ なんであんな

に心から喜べるんだろ？ まだなんにも分からない僕までが、なんだかうれしくてたまらない。なぜだろう?!

ナレーション

次の日の日曜日の朝、浩はお母さんと一緒にクリスマス礼拝に出ました。すばらしい聖歌隊の合唱のあとで始まった牧師先生のメッセージを、浩は心を開いて聴き入っていました。

牧師

「飼い葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる余地がなかった」とルカは言っています。あれほど待ち望んだ救い主が来られたのに、だれもその誕生を喜ばなかったのです。わたしたちは今年もクリスマスを祝います。高校生の皆さんも、昨日、楽しい時を過ごしたでしょう。でも、わたしたちが本当にクリスマスを喜べるのは、神のみ子が、このわたしのために、わたしの罪の救いのために生まれてくださったということを感じるからではありませんか？ この馬小屋のような汚れた心の中に、わたしの主、わたしの救い主としてイエス様をお迎えすること、それが本当のクリスマスの喜びなのです。

(音楽)

(賛美歌「もろびとこぞりて」高まって——。)

<完>